

河野正司教授退職によせて



教授退職によせて

医歯学系・教授
(摂食機能再建学分野) 河野正司

本年3月を持って本学医歯学系の教授を定年退職となります。これまでの大学生活を振り返ってみると、1965年に東京医科歯科大学大学院修了後24年間を東京医科歯科大学に、その後1993年に新潟大学歯学部歯科補綴学第1講座へ赴任、大学院部局化により講座の名前は大学院医歯学総合研究科摂食機能再建学分野と変わりましたが、今日までの13年間大変にお世話になりました。

新潟大学に赴任後は、それまでに暖めてきたテーマを中心に研究と教育とに専念し、多才な教室員と楽しい毎日を送らせていただきました。咀嚼や発語などの顎機能が滑らかに行うことができる義歯を患者様の口腔内に装着できるようにと、顎運動を中心とした顎機能研究、回復した顎機能を評価するために咀嚼機能測定法の研究、顎骨や顎関節の骨構造に関する基礎的な研究、さらには高齢者を対象とした口腔ケアに関する研究を予防歯科や加齢歯科の先生方、さらには県歯科医師会と行政の先生方と共同で実施させていただきました。

教室の先生方には、学部を卒業した後の20歳代が人生で一番楽しい青春時代だよ、臨床にも研究にも、そしてデートにも思いっきり活動できる時だと。この様に感じてきた私自身の「青春」も、その「終焉」を今日まで延ばすことが出来てきたのは、教室員の方々和研究活動を続けてこられた

からだと感謝しております。

大学における教員は、自分に課せられた学問分野において真摯に研究し、その結果を教育に生かすことがその使命の遂行には必要でありましょう。さらに歯学部のように臨床分野を持った学部では、加えて診療という面においても働くことが加わります。

むしろ臨床分野の学問領域に身をおく我々にとっては、まず患者様の持つ訴えや悩みから学ぶことが第一歩でしょう。患者様と相対して共に悩むことから、それを解決する臨床そして研究へのモチベーションが生じて来ます。

これからの歯科臨床分野を担う青年たちよ、大いに臨床で悩み、そこから大きな有効な研究をしていただきたい。得られた新知見は広く発表することになるが、その発表は学会の講演だけではなく、必ず論文として残していかななくてはなりません。それが後進への義務でありましょう。言い換えれば論文がその研究を評価するものとして後世に残せるものであります。これを行うことが研究を支えてくださっている tax payer 国民への果たすべき義務でありましょう。

最後に13年間にわたり歯科補綴学の臨床、研究、教育の場を与えてくださった新大歯学部にも重ねて深謝申し上げ、新潟大学歯学部のさらなる発展を祈念申し上げます。ありがとうございました。

河野教授ご退職によせて

歯学部長 山田好秋

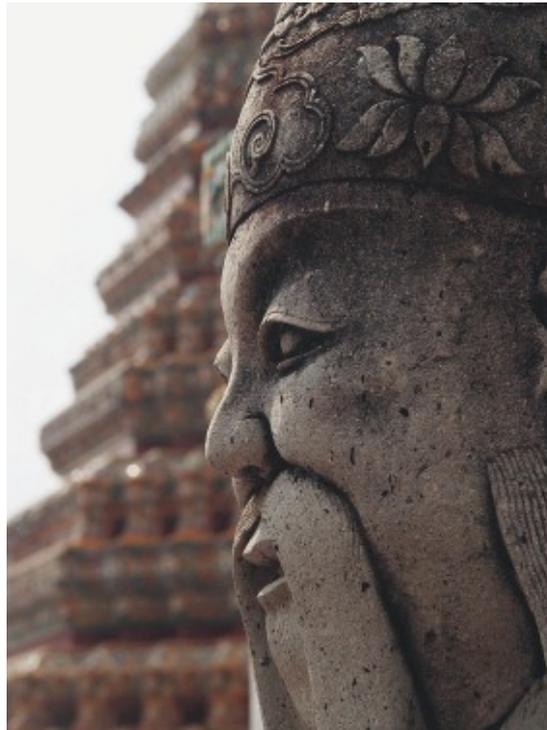
河野先生、ご退職おめでとうございます。歯科補綴学教室の主任教授として、さらに歯学部附属病院長として歯学部の発展にご尽力くださったこと、ここに皆を代表して御礼申し上げます。

河野教授は昭和40年に東京医科歯科大学歯学部をご卒業の後、昭和44年に大学院歯学研究科を修了され、補綴学の研究・教育に従事されてきました。この間、「全運動軸」について著名な論文を完成され、「顎機能障害の発症機構」に関する研究を中心に数多くの研究成果をあげられ、また数多くの大学院生を指導してこられました。この分野では石岡靖新潟大学名誉教授を中心に組織された日本顎口腔機能学会が先進的な学会ですが、河野教授はこの学会の中心メンバーとして新潟大学の名声を引き継いで下さいました。

平成5年に東京医科歯科大学より新潟大学に赴任され、歯学部附属病院長時代には歯科総合診療

部の設置、診療科の再編、ISO9001認証取得等にご尽力下さいました。また、附属病院統合に際しても医学部・歯学部の間立ち最善の道を検討して、現在の医歯学総合病院の礎を作られました。平成16年には新潟大学理事に就任され新潟大学の教育の総責任者である教育担当副学長として教育改革に取り組んでおられます。

大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻の教授としてはこの3月をもって退任されますが、新潟大学理事として引き続きご活躍のこととうかがっております。我々は非力ではありますが、先生が残して下さいました業績に恥じぬよう、教育・研究そして臨床の場を守って行く覚悟です。先生におかれましても、国立大学法人化直後の厳しい環境の中で、大学運営にご尽力いただけますようお願いいたします。



河野教授の摂食機能再建学講座ご退職によせて

新潟大学医歯学総合病院副院長 宮崎 秀夫

河野先生ご退職おめでとうございます。

先生は1993年3月に東京医科歯科大学から赴任され、以来13年間、歯科補綴学第一講座（現：摂食機能再建学講座）の教授として、また、病院長として歯学部・歯学部附属病院に、さらに、副学長として新潟大学に多大な貢献をしてこられました。先生にとりましては瞬く間に経過した年月ではなかったかと推察いたしますが、それも、特に密度の濃い充実した日々を送られたがためと存じます。

河野先生と厚生科学研究をご一緒させていただいたことがあります。補綴学は「俺のやり方が正しい」あるいは「俺の理論が真実である」が罷り通る世界であり、私は関わりになりたくないと、以前は思っておりました。しかし、シンポジウムの際に、先生は「エビデンス」による「理論の構築」を貫いた研究発表をされ、「俺が正しい」先生を見事に論破なさっているところを拝見し、補綴学も捨てたものではないと認識を新たにしました。補綴学に関わる全ての先生には、お気に触りましたら申し訳ありませんが、偉い先生はそういう古いタイプの方が多くいらっしゃいました。それ以来、先生には咬合や咀嚼に関する研究に関わる場所でよく相談に乗っていただくようになり、我々の研究の展開に必要で、鍵となる科学的根拠を得るための研究も快くお引き受けいただいたりもしました。

研究もさることながら、先生のご功績は病院の運営にあったと言っても過言ではないでしょう。

ご承知のように、歯学部附属病院長時代（1999～2003年）は歯病の改革、病院統合準備、大学の法人化など、激動期でありました。私がお手伝いをさせていただいたその4年間というもの、先生の実力を目の当たりにしてきました。ISO9001取得を始め、歯科総合診療部の設置、診療科の再編成、特色外来の編成、病診連携強化のための歯病ニュースレターの発刊など先生の豊富なアイデアと強いリーダーシップにより、病院歯科の確固たる基盤を築き上げられました。先生の理念は「患者様にわかりやすい、患者様の目線に立った」という配慮と「質の高い歯科医療」を提供するという一貫したものでありました。そして、そのために必要な意識改革を我々に求められました。

副学長になられてからは激務のために、歯学部や附属病院でお見かけする機会がほとんどなくなりました。しかし、先生は、歯学部や病院歯科のことを常に気にかけておられ、我々が発展するために（ひいては新潟大学の発展に寄与するものであるが）知恵を絞った要求に対して、その必要性、重要性をいろいろな局面でご支援してくださっていたことをよく存じ上げています。先生には、何ごとにおいても学ばせていただきましたことを深く感謝いたします。しばらくは、副学長・理事として大学に残られるとお聞きし、心強く思っております。我々の不甲斐なさを嘆かれることなく、見捨てられることなく、今後とも、ご指導、ご教示を念願する次第であります。

河野正司教授最終講義を終わって

口腔生命科学系列・助教授 小林 博
(摂食機能再建学)

いずこの教授も、最後の数年は、大きな学会等の主催が重なり教室員は大変な様です。河野先生もその通りで、全身咬合学会、咀嚼学会、顎関節学会、最後の年には補綴学会と毎年のように学会を主催なさいました。退職行事が教室員にとっても、最後の締めくくりのような感があります。最終講義が締めくくりのプレリュードで、この後祝賀会を控えています。なんとか盛会のうちに最初の山を越えましたが、まだ忙しい日が続きます。

最終講義は、「運動学からみた咬合と全身の健康」と題し、平成18年2月2日(木)16:30から有壬記念館において、宮崎秀夫副病院長に座長の労を

とっていただき開催いたしました。予想された雪もほとんどなく、この季節としては天候にも恵まれ、講義は盛況で、増設した180席が埋り、立ち見が出るほどの出席者でした。下顎の動きから全身への影響の研究経過を詳説してくださり、さらには後進へ送る serendipity という言葉で結ばれた熱のこもった講演でした。学生からは、それに答えての感謝の花束が贈呈されました。

終了後同会場の一階で簡単な懇親会を開催しました。東京医科歯科大学の三浦宏之教授と板東武彦副学長のお言葉をいただき和やかに閉会しました。

